「知られざる完全不倫」

—2稿—

2025/3/18

雨森　れに

〈人物表〉

武田　和樹　（３５）なつみとＷ不倫中
宇野　なつみ　（２７）和樹の不倫相手。受付嬢
武田　沙理　（３０）和樹の妻

井上　唯　（２５）受付嬢
同僚Ａ　（３５）

1.　レストラン（夜）

高級レストラン。武田和樹（35）と宇野なつみ（27）は、デザートを楽しんでいる。

和樹　「突然なんだけど、これ」

和樹が指輪の箱を差し出す。

和樹　「俺たち、もう長いじゃん」

なつみ「え、うそ。……いいの？」

和樹　「俺一人でつけてろって？」

和樹が右手薬指にはまっている指輪を見せる。

なつみは嬉しそうにはにかみ、

なつみ「右って恋人っぽくていいね」

左手薬指の結婚指輪を外してから、右手薬指に新しい指輪をはめる。

和樹に右手を見せて、悪戯っぽく笑う。

なつみ「二人の時だけ、ね？」

和樹　「いいだろ？　しかも、この指輪には秘密があってさ」

なつみ「なになに。教えて」

和樹、にやりと笑う。

和樹　「明日、わかるよ」

2.　会社・エントランス（昼）

オフィスビルのエントランス。受付カウンターがあり、その前方に来客用の椅子が設置されている。

カウンターでは井上唯（25）が事務作業をしている。

和樹がカウンターにスタバの袋を置く。

和樹　「お疲れ様。今朝お願いしてあった件なんだけど、大丈夫そう？」

井上　「……18時のご案内。あと、宇野さんをバックヤードに戻す。ですよね」

和樹　「うん。宇野さんに見つかると仕事増えるからさ。いけそう？」

井上　「（スタバの袋を見て）まぁ、調整しますけど……」

和樹　「いつも助かるよ。明日もこれ（袋を指差して）買ってく

るからさ」

井上、嬉しそうに頷く。

3. 会社・非常階段（昼）

踊り場。

和樹と同僚A、向き合って煙草を吸っている。

和樹がスマホを触り始める。

同僚A、和樹の手元を見て、

同僚A「ぶっちゃけ、今、家どんな感じ？」

和樹「どんなって？」

同僚A「指輪ないからさ」

和樹、納得したように、

和樹「あー。5年前に失くしたんだわ」

同僚A「えぇ、そんなにしてなかったっけ。つか、嫁さん怒ったろ」

和樹「今でも怒ってるよ。いろいろ疑ってくるし」

同僚A「女がいるかもってことか」

和樹「見たことない？　たまに不安で迎えにくんの」

同僚A「あぁ……もしかして、失くしてからずっと？」

和樹「少なくなってるけどねー」

和樹、伸びをしながら、

和樹「まぁ、もうすぐなくなるっしょ」

4. 会社・トイレ前・廊下（夜）

和樹が腕時計を確認する。17時50分。

トイレに入っていく。

5. 会社・トイレ・個室（夜）

和樹がスーツジャケットを脱ぐ。

小銭入れを取り出し、中から指輪を出す。

にやりと笑い、指輪をジャケットのポケットへ、直接入れる。

6.　会社・エントランス（夜）

武田沙理（３０）が受付に現れる。

沙理　「すみません。営業部、武田和樹の妻ですが……」

井上　「あ、はい。お伺いしております。すぐにお呼びしますね」

井上が内線をかける。

井上　「お疲れ様です。奥様がいらっしゃってます。はい。はい」

内線を切って、

井上　「まもなくいらっしゃるそうです。よろしければ、おかけになってお待ちください」

井上が椅子をすすめる。

しかし、沙理は座ろうとせず、井上を真顔で見つめる。

井上　「あの……？」

沙理　「いえ、なんでもないんです。すみません」

和樹　「沙理、お待たせ」

和樹がジャケットを抱えた状態で現れる。

和樹　「（沙理の背を押して）ほら、行こう」

ジャケットから指輪が落ちる。

沙理がゆっくりと指輪を拾う。

沙理　「わたしたちの、指輪……」

沙理がうずくまる。

和樹　「お、おい」

沙理　「失くしたって言ってたじゃない」

和樹　「と思ったんだけど、今日会社のロッカーで見つけて……」

沙理　「見つかったならすぐ教えてよ。もしかしたら捨てたのかもって……不安だったのに」

和樹　「ご、ごめん」

沙理の泣き声が聞こえる。

和樹　「とにかく帰ろう。な？　（井上を見て）井上さん、ごめんね」

和樹と沙理が出口へ向かう。

×　×　×

物陰に隠れていたなつみ。驚いた表情をしている。

7.

駐車場（夜）

和樹が沙理を支えながら歩いている。
急に沙理が立ち止まる。

和樹　「ん？　これうちの車じゃないけど」
沙理　「指輪、なんでしてなかったの」
和樹　「えっ？」
沙理　「見つかったならはめておけばいいのに。なんで？」
和樹　「いきなり着けてたら変じゃん」
沙理　「結婚してるのに指輪してないほうが珍しいでしょ。なんか隠してるよね？」
和樹　「ないない。家帰ったら話そうと思ってたし」
沙理　「だったら今着けて」
和樹　「いや、なんでそんな急いでんの」
沙理　「いいから！」
沙理が指輪を和樹にはめようとする。
が、入らない。
沙理　「え？　なんで？」
和樹、申し訳なさそうに、
和樹　「俺、昔より太っただろ」
沙理が目を丸くする。
和樹は自分のおなかを擦る。
和樹　「恥ずかしくて言えないっていうか、言いたくないっていうか」
沙理、笑いだす。
沙理　「あなたってそんなにオジサンになったんだ」
和樹　「やめろよ。俺だって認めたくないんだから」
沙理が諦めたようにため息をつく。
沙理　「そっか。あれから5年かぁ。私ばっか、なんかバカみたい」
和樹　「誤解させた俺が悪いんだし。沙理はもっと責めていいよ」
沙理　「責め続けるのも大変なんだよ。許すのも大変だけど」
和樹　「そっか。そうだよな……」
沙理　「……今度、サイズ直し行く？」
和樹　「それは待って。痩せるから。指輪あると、いろいろモチ

べあがるし」
沙理　「そう？」
沙理が微笑む。

8.　ラブホテル・室内（夜）

薄暗い室内。和樹はなつみに腕枕している。
なつみ「奥さん、騙されてたね」
和樹　「今その話すんの？」
なつみ「だってビックリしたんだもん」
なつみが和樹の右手から指輪を抜く。
なつみ「こっちには入るけど」
和樹の左手薬指に指輪を当てる。
なつみ「こっちには入らない」
和樹　「右のほうが細いからな」
なつみ「ほんと、よく考えたよね」
和樹　「あれから家が平和だよ」
なつみ「悪い人だなぁ。痩せる気もないんでしょ？」
和樹　「わかってるねぇ」
なつみ「結婚指輪と同じペアリングって、鬼畜」
和樹がなつみの指輪にキスをする。
和樹　「嫌いじゃないでしょ」
なつみ「むしろ好きかも」
ふたりがゆっくりと唇を重ねる。

9.　武田宅・リビング（夜）

時計の秒針の音。
ダイニングテーブルに、ラップのかかった料理と車の鍵、卓上時計が置いてある。
沙理は椅子に座っている。何か考えている様子。
時計が定刻を告げる。時間は２２時。
沙理は車の鍵に手を伸ばすが、すぐに引っ込める。
おもむろに自分の結婚指輪を見て、微笑む。

おわり